

# 成田和信『幸福をめぐる哲学』をめぐるコメント

江口聡

現代倫理研究会合評会用

2021年12月19日

## 1 全体

- 丁寧、明晰、網羅的。すばらしい。例もオリジナルで楽しい。
- 快楽説、客観リスト説、欲求実現説（欲求充足説）の説明と反駁もほぼ完璧。
- 態度説（情動態度説、ケア態度説）がキモ。しかし、「本人が大切に思っていることが実現することが幸福である（利益である）」という立場は常識的すぎないか？
- 提唱するケア型評価説と、かなり似た立場である（もちろん違いもある）サムナーの真正幸福説やフェルドマンの態度的快楽説（命題的態度説）との異同の説明が少し甘いかもしれないが、学者の名前より議論の方が重要なので OK。

## 2 基本的な確認

### 2.1 用語法

- 「幸福価値」に関しては、むしろ直接に「(本当の／人生を向上させる) 利益」という言葉の方が適切だったかもしれない（問題はない）。
- 「欲求充足」は混乱しやすい。日本語では、欲求の「満足」と欲求の「実現」は区別すべきに思われる。

### 2.2 構成

- 第1部：幸福＝本人にとってよいことが生じている
- 第2部：幸福＝本人が大切に思っていることの実現が幸福
- のちに検討するように、成田は幸福（＝よい生活）に寄与する要因が究極的には何であるのか、を検討している。
- おおざっぱな候補は次のようになる。四角で囲ったものが成田が特に有望であると考えている立場のようだ。
- 快楽説〔価値のない快楽があるように思える問題（卑俗性問題）により却下〕

- 感覚説
- 態度的対象説
- 命題的態度説
- 客観リスト説〔疎遠問題によって却下〕
  - 客観リスト説
  - 完成説
- 欲求充足（実現）説〔虚しさ問題、僥倖問題によって却下〕
  - 現実的欲求
  - 理想的欲求
- 態度説
  - 情動型〔知らぬが仏問題、邪悪な喜び問題によって却下〕
  - ケア型〔ほぼ万能？〕

### 3 成田のケア型評価説

#### 3.1 評価説

成田は欲求充足説を検討し、「虚しさ」「僥倖」など、欲求の充足が利益とならないこと、および欲求していない意外な利益があるかもしれないことから、成田は欲求充足説に替えて評価説を採用する。幸福価値（利益）に関する評価説には、単なる情動的評価（うれしい、悲しいなど）を基本とするものと、「大切に思う」care about という特別な態度を強調するものがあり、「大切に思う」を強調した「ケア型評価説」を推奨する。

「大切に思う」は欲求ではなく、態度である。しかし、欲求に比べて態度という表現はわかりにくい。成田によれば、態度は「～をしたい／望む」という欲求だけでなく、認知、判断、情動と情動の傾向、意志、注意などを幅広く含む心的状態である。

成田本の核になるアイディアは次のものだ（CV1、CV3をそれぞれネガティブにしたものがCV2、CV4であるが省略）。

- (CV1) 大切に思っている事態が実現することは常に人にとって良いことであり（根本的な幸福価値をもち）、そしてそのことだけが（根本的な意味で）人にとって良いことである（根本的な幸福価値をもつ）。(p.175)
- (CV3) 大切に思っている事態が実現することがもつ幸福価値の大きさは、大切に思うという気持ちの深さによって左右され、その気持ちが深ければ深いほど、その幸福価値は大きくなる。

成田が考えている「事態」と呼ぶ対象は実際にはさまざまで、命題の形の場合もあれば、個物（個人）の場合もある。「家族や友人や飼い犬」など特定の人物、「愛用の時計や故郷など」物や場所、「自由や平等、民主制、友人関係」など理念や制度や関係、「哲学を勉強する」「正直である」「健康である」など自分の行為や性質や状態なども含む (p.148)。

大切に思われる対象は事態（世界の状態）と個物である。対象にとっての「良いこと」と「悪いこと」がある。対象が事態の場合は、その事態の成立そのものと成立に役立つ事柄。個別の場合は (1) 人の場合はその人の幸福の増大やそれに役立つ事柄、(2) 動物の場合は苦痛の少ない動物にふさわしい生活を送ること、(3) 植

物の場合は成長すること、(4) 無生物の場合は、その保全や本来の機能の発揮など。

狭い意味での「事態」に関して成田は「哲学がより栄える」のようなものまで考えているようだ。個物に関しては、その個物が繁栄することを考えている。幸福になること、成長することなどが例にあげられている。

「大切に思う」という心的態度の対象が個物である場合には……人がその対象である場合には、その人の幸福が増大することや、その人の幸福の増大に役立つことが、その人にとって良いことである。(p.149)

しかしこれはかなり奇妙なことである。我々は（そして成田は）、我々にとってなにが幸福であるか、を考えているはずだが、成田の答は結局は「我々が大切視する人や物が繁栄すること＝幸福であること」が我々の幸福を構成すると主張しているわけである。しかし、我々が本当に知りたいのは、その我々が大切視している人や物が繁栄している＝幸福であるとはどういうことかなので、こうした循環した規定はあまり役に立たない。

おそらく成田は、大切視による幸福・福利の規定のなかに、客観リスト的ななにかを（たとえば「成長」や他の事態の成立）をもちこんでしまっているのである。もっと根本的には、対象にとっての「良いこと」「悪いこと」という発想のなかに、我々が求めている「幸福」をまぜこんでしまっている。端的に言って、成田の議論は、幸福の規定のなかに幸福を入れてしまって循環している。この循環が致命的なものかどうかはわからない。お互いを大切に思う人間関係においては、相手が幸福になることが自分が幸福になることであり、また自分が幸福になることが相手が幸福なることだ、ということはあるだろう。しかし奇妙さは否めない。

しかしそれは譲歩して、我々が大切視する対象の幸福や繁栄は、我々が求めている幸福や繁栄とは別に規定することができる、と想定してみよう。つまり、大切視の対象の幸福・繁栄の基準は客観的に定まるが、私の幸福・繁栄は、私がなにを大切視するかという点と、その対象の幸福繁栄の二点に依存する、と考えるわけである。

成田の「大切に思う」はなかなか特殊なものなので、少しネガティブな規定もしておこう。成田は、幸福価値をなすにふさわしい「大切に思う」を探そうとしている。

### 3.2 「大切に思う」は二階の態度か？→ 二階の態度ではない

「大切に思う」は、日本語の字面からすれば「思う」という判断が入っていることからして、二階の態度、すなわち自分の態度についての態度として考えることが適切であるように思われる。この点は成田も検討している。

フランクファートは、「大切に思う」(care about) という心的態度には、(1) ある（一階の）欲求、(2) その一階の欲求にもとづいて行為したいという二階の欲求、(3) その一階の欲求が持続してほしいという二階の欲求、そして(4)、(2)と(3)の二つの二階の欲求に満足している、という四つの要素から成り立つと主張している(7-3, p.166)。

しかし成田は「大切に思う」は二階の態度および欲求を（必然的に？）含む特殊な態度を指すという立場を否定する。なぜなら、幼児や認知症が進んだ老人は、自分がなにを大切に思っているかについて十分反省的な意識をもっていないかもしれないからである(7-3, p.170)。二階の欲求をもつことは、しばしば成熟し倫理的な主体・客体である人間としての人物（ヒューマンパーソン）の特徴だとされるのだが、二階の態度が幸福および幸福価値（利益）に必須だということになれば、幼児や重い認知症老人は利益をもちえない（したがって幸福になりえない）、ということになりかねないからである。成田は成長した人においては、「大切に思う」という心理的状态から、因果的に上の(2)(3)(4)の欲求が派生すると考える(pp.173-174)。

しかし、成田の言うとおりでとすると、「大切に思う」ということが他のポジティブな態度や欲求とどう違うのか、という問題が生じる。

### 3.3 「大切に思う」は優先的な態度か？→そう考えるとこまる？

「大切に思う」の特徴づけの一つの解釈は、「大切に思う」という態度は、他の態度や欲求と比較して、優先的（オーバーライディング）な態度である、とすることだろう。

我々は一部の欲求を優先的なものとすることがある。たとえば、若くして哲学を志した青年は、哲学をなによりも大事なものと思ひ、それ自体ではさして強いとはいえないこの欲求を、他のさまざまな欲求（お金が欲しい、デートしたいなど）のそれぞれ強い欲求よりも優先して、（たとえば）ウィトゲンシュタインの哲学の読解に邁進するかもしれない。しかしこの場合、彼ないし彼女は、哲学の勉強を欲求しているだけでなく、それが他の欲求より優先されるべきだとか、優先される価値があると考えているのだろう。とすると、哲学の勉強をしたいという欲求は二階の欲求であり、哲学の勉強を大切だと思ふ態度も二階の（反省的）態度だと言えそう。

おそらく成田は、「大切に思う」は二階の（反省的）態度であり、成熟した人間の幸福や利益は、動物や発達途中の子供とは質のちがうものだ、ということ認めてしまった方がよいのではないだろうか（そしてそうした幸福・利益についての我々の判断は三階の態度であるかもしれない）。

### 3.4 「大切に思う」は現実の態度か、理想的な態度か／態度は「合理的」な必要があるか →限定が足りないのではないか？

仮に、態度あるいは欲求を二階の態度や欲求に限定しても（限定しなくても）、我々はあまりにもたくさんものごとを大切に思っている。成田先生自身が、哲学や家族や世界平和や白鳳との出会いを大切に思っていることは理解できるが、大切だと思っているものをすべてリストアップすることは当然不可能だろう。

（あまり指摘されているところを見たことがないが）快樂説の魅力は、幸福価値（利益）として算定されるものは、対象は当人が実際に感じている感覚やその肯定的な態度をとっている対象に限定されることだ。快樂説では、基本的に我々が目をさまして意識される快や苦痛、あるいはポジティブ／ネガティブな態度が重要だとされる。これはフェルドマンの態度的快樂説でもそうで、基本的に現実に当人の意識に反映されている命題に対する態度が問題にされているはずである（これは参照必要だがあとで）。我々の意識は無限に成立するわけではないので、かなり限定された感覚や態度を扱うことになる。

これに対応して、欲求説も我々が現にもっている欲求にのみ議論や評価を限定するという選択肢がある。しかしそれでは、誤った信念に基づいた欲求（学者になればモテモテになるはずだ）や、論理的に不整合な欲求（コーヒーより紅茶がいい、でも紅茶より牛乳がよい、しかし牛乳飲むよりはコーヒー飲みたい）など、不合理な欲求が入りこむ可能性がある。したがってたいい欲求説論者は、(1) まずまずの、あるいは十分な情報と、(2) 最低限の論理的整合性にもとづいた欲求の実現を利益としてカウントしようとする。しかしこの時点ですでに欲求説は現実の欲求ではなく、程度の差はあれ理想的な欲求をカウントすることになる。

（合理性にあまり意味を読みこむ必要はない。いにしへのリチャード・ブランドや R. M. ヘアは、「認知精神療法」cognitive psychotherapy を生き延びるような欲求は（ほぼ）すべて合理的であるとみなしてよいと考えていたようである。具体的には最大の事実に知識と論理にさらしたのちにも生き延びる欲求が「合理的」である。）

成田は誤った信念に基づく態度についてはかなり気にしている。基本的には、態度の対象が実際に生じているかどうかを大切に思っているかどうか依存する、と考えているようだ(第8章1-5)。ここでも問題になっているのは、「自分が大切に思っている対象が実現してほしい」という二階の欲求・態度のようだ。

さらにもっと深刻なのは、我々の態度について合理性を検討する必要はないのか、という問題である。各種の欲求は理想的には、事態 A (命題) より事態 B (命題) を選好する、というかたで命題についての選好の形に書き直すことができる。「水が飲みたい」という欲求は、「私が水を飲む」と「私が水を飲まない」という二つの命題の前者を選好するということである。

こうして(理想的に)書き直した形の選好については、その論理的不整合を指摘することができる。先に指摘したように、(A)「私がコーヒーを飲む」(B)「私が紅茶を飲む」(C)「私が牛乳を飲む」について、A より B を選好するが、B より C を選好し、さらに C より A を選好するといった形の選好の体系はおそらく不合理であると指摘することができる。

ところが、信念、欲求、情動、認知、注意などを含んだもっと広い概念である「態度」についてこうした論理的整合性の云々することが可能かどうかは私にはよくわからない。成田の意見を聞きたいところである。

### 3.5 時間の問題と経験しない事態

(この項目時間ぎれ)

第8章3-1の「時間の問題」での成田の提案では、大切に思う事態が実現すること(のみ)が当人にとって利益である(CV1)が成立するのは、「大切に思う」という心的態度が生じている時間(時点)と、その心的態度の対象である事態が実現する時間が重なっている場合にかぎられる(CV1-1, p.206)。

この提案を見ると、成田の「ケア型評価説」は快樂説の一種なのではないかと思う。特にフェルドマンの態度的快樂説に近い、違いは、その人の意識にあがっている事態の成立が問題になるか(フェルドマン)、態度の実際の実現が問題になるか(成田)、という一点にある。典型的には「妻の浮気」やノージックの「経験機械問題」などにかかわる意見の相違がある。私自身は我々の経験しない事態の成立という現象が、なぜ私たちの幸福にかかわるのかいまいち納得していない。けっきょくは幸福と利益は経験がすべてなのではないかと疑っている。

我々には、我々が望み実現すれば喜びを感じるようなことがらが、単なる主観的な思いこみではなく、客観的に成立してほしいという強い欲求がある(二階の欲求ものかどうかはよくわからない)。我々は他人に騙されたりしたくないし、ぬか喜びもしたくないものだ。思いこみや騙されたりすることは我々の将来を危うくするので、「本当のことを知りたい」という欲求おそらく非常に合理的であり、ソクラテスの昔からの哲学(知への愛)の基本でもある。しかし、我々は自分の経験で知りえることしか知りえないのだから(論理的な真理でさえそうかもしれない)、あまりに客観的世界での事態の成立にこだわるのは考えものだ。

ちなみに心理学の分野では、我々が「ポジティブ幻想」をもっていることが知られている。我々は自分の能力やルックスなどを現実より少し高めに評価する傾向がある\*1。これに対して、うつ病に罹患しやすい人々やうつ病患者は、事態の評価が一般より正確であることが知られている。私はこの知見を知り、真実を追求するのをやめ、ポジティブな幻想を積極的に身につける訓練をしている。

(時間切れ)

---

\*1 「あなたは自分の運転は平均と比べてどれくらい上手だと思いますか、10段階で評価してください」などと質問すると、その結果を合算すると中央より上になる → みな少しずつ自分の能力を実際より高く評価している。

### 3.6 「大切に思う」のポイントは「注意」かも

上のような疑問があり、私自身は成田の「大切に思う」の性格づけはまだ発展途上だと考える。他の様々な態度や欲求と、「大切に思う」という態度との質的な違いや優先性が、まだ十分には明確化されていないようだ。それは単に、特に強い関心や欲求をとまなう態度と考えるとよいのだろうか。

ここで、フェルドマンの態度的快樂説から若干のヒントをもってくることができるかもしれない。私の理解では、フェルドマンはある人物の幸福の度合いを考える上で、その人物の（たとえば一日の）注意が何に向けられているかが重要だと指摘していたはずだ。

これはおもしろい考え方で、まったく同じ生活状況でも、われわれがそのネガティブな側面に注意を払うか、ポジティブな側面に注意を払うかで（少なくとも）われわれの幸福感や主観的満足度は大きく違っている（「気分」の影響も大きい）。我々は生活のネガティブな側面ではなくポジティブな側面に注意を払うべきだと言われるが（“Always look on the bright side of life!”）、それには人類の蓄積的な智慧というべきものが感じられる。

一方、我々はいくらある対象を「大切に思っている」としても、それに払う注意が十分ではない場合には本当に大切に思っているかどうか怪しい場合がある\*2。「大切に思う」という態度の主要な部分は、一日、一週間、一月のあいだにそれについて意識を向けている量からなる、という性格づけはどうだろうか\*3。

たとえば、ある人物が、（非常に単純化して）1日の半分（50%、0.5）を大切にしている哲学を気にしており、3割を妻子、1割を両親、1割を晩酌の質に注意しているとすれば、

$$\text{1日の幸福の総量} = \text{哲学の反映に対する満足度} * 0.5 + \text{妻子の幸福に対する満足度} * 0.3 + \text{両親の幸福に対する満足} * 0.1 + \text{晩酌の満足度} * 0.1$$

のような形で考えることができるかもしれない。

おもしろいのは、「大切に思わない」としても「気になる」(care about) ことはあることだ。上とはまた別のある人物が、タバコの快樂は非常にくだらないものだと思いますながらニコチン依存に苦しんでいて喫煙不可能な場所ではそれを非常に気にしており（1日の半分、0.5）、また、残りの半分を見る必要もないSNSでの馬鹿げた喧嘩を気にしているとしよう。この人物の不幸は

$$\text{1日の不幸の総量} = \text{ニコチン中毒なのにタバコ吸えない不快の総量} * 0.5 + \text{SNS 喧嘩を見る不快の総量} * 0.5$$

この人物が幸福になる（あるいはその馬鹿げた不幸を減らす）には、タバコとSNSを見るのをすっぱりとやめ、上の人物を見習って哲学でも勉強してほどほどに晩酌することだというのは誰にでもわかる。また、成田が数回例に出している「戸締り強迫」の事例では、戸締りしたかどうかを確認せざるをえないことで、戸締り強迫をもつ人が、戸締りを確認しても利益を得ない／幸福にならないのは、まさに余計な戸締り確認をしなければならぬということに注意を奪われているということに注意ししよう。

\*2 私は自分の年老いた父母を大切に思っているつもりだが、一日に思い出すことがどれくらいあるかといわれると心細い。

\*3 ちなみに、この性格づけだと私は哲学あまり大切に思っていないが、音楽やSNSは大切に思っているようだ。

このように、成田の「大切に思う」という（ひょっとしたら二階の）態度による経験の価値づけは、特に「注意・関心」に注目すれば、我々の幸福の理解に寄与するものになる可能性がある。

## 4 構成物としての福利・幸福

それにしても、成田の「大切に思っていることが実現することが利益／幸福」という性格づけは、私には常識的すぎるように見える。あんまりにも常識的なので、そもそも私たちはなんのために幸福について考えているのだろうかと考えざるをえない。

### 4.1 セリグマンの福利概念

幸福研究・ポジティブ心理学で著名なマーティン・セリグマンは、最近非常に重要な指摘をおこなっているように思われる。2002年の『「ほんものの幸せ」の見つけ方』（原題 *Authentic Happiness*, Seligman (2002)）では、幸福感（ハピネス）がテーマであり、ハピネスの構成要素としてポジティブ感情（快）、エンゲージメント（活動への没入<sup>\*4</sup>）、（人生・活動の）「意味」<sup>\*5</sup>があげられた。快、没入、意味は幸福感を向上させるという点で生活を改善する。幸福感は我々にとって利益である。

一方2021年の『ポジティブ心理学の挑戦』（Seligman, 2011）では、彼のポジティブ心理学の主要テーマを「ハピネス」から「ウェルビーイング」に変更したことについて、次のように述べられている。

ウェルビーイングは構成物 a construct であり、幸福感は物 a thing である。「実在物」 a real thing とは、直接に測定できる実体 entity である。実体は操作的に定義されたものである場合がある can be "operationalized"。つまり、詳細な尺度セットがそれを定義している場合がある。たとえば、気象学における風冷指数 (wind-chill factor) は、水が凍る（それゆえ凍傷になってしまう）ような、温度と風速の組み合わせによって決まる。〔セリグマンの過去の理論である〕真正幸福理論 authentic happiness theory は、実在物——幸福感——を、1 から 10 の目盛の上で、人々が自分の生活についてもつ満足によって定義しようとする。最大のポジティブ感情、最大のエンゲージメント<sup>\*6</sup>、最大の〔人生／生活の〕意味をもつ人々が最もハッピーな人々であり、またもっとも人生に満足している人々である。〔これに対して新しい理論である〕ウェルビーイング理論は、ポジティブ心理学のトピックが実在物であることは否定する。むしろ、ポジティブ心理学のトピックは構成物——ウェルビーイング——であり、それは、複数の測定可能な要素からなるものである。この構成物のそれぞれの要素は測定可能な要素であり、それぞれ実在物であり、それぞれウェルビーイングに寄与するものであるが、どれも独立でウェルビーイングを定義するものではない。

気象学では、「天気」がそうした構成物である。天気はそれ自体では実在物ではない。操作可能な実在物であるような複数の要素が、天気に寄与する。その要素とはたとえば温度、湿度、風速、気圧などである。本書でのテーマがポジティブ心理学の研究ではなく、「自由」に関する研究であったとしよう。自由

<sup>\*4</sup> 心理学者チクセントミハイの指摘する「フロー」現象である。活動に没入した状態では、すべての注意が活動そのものに向かうため、自己の感覚が失なわれる。つまり、集中した活動をおこなっている時点では快や不快といった感覚も失なわれており、厳密には活動に没入した状態に快を感じているとは言えない。しかし事後には「楽しかった」「充実していた」と回顧される。

<sup>\*5</sup> この meaning は、われわれの人生全体および個別の活動の（哲学的な含みのある）意味や意義を指すが、内実を議論する余地がないので「意味」と括弧つきで表現することにする。

について科学的に研究するにはどうしたらよいだろうか？ 自由は構成物であり、実在物ではない。そして、自由にはいくつかの要素が関係している。他のあらゆる要素の中でも特に、市民がどれくらい自由だと感じているか、出版物がどれくらいの頻度で検閲されているか、選挙の頻度、人口に対する国会議員の比率、役人の汚職率などが関係している。自由という構成物そのものと比較して、それぞれの要素は測定可能な物であるが、これらの要素を測ることによってのみ、我々はどれくらい自由があるかという全体像を得ることができる。

ウェルビーイングとは、その構造として「天気」や「自由」のようなものだ。一つの尺度だけでは完全には定義できるものではなく、複数のものがそれに寄与している。ウェルビーイングには複数の要素があり、それぞれ測定できる。比較のために述べれば、真正幸福理論では、人生の満足度によって幸福を操作的に定義している。それはちょうど気温と風速が風冷指数を定義しているようなものだ。ここで肝要なのは、ウェルビーイングの要素それぞれ自体は種類が異なるのもので、ということだ。以前の真正幸福理論とはちがって、ウェルビーイング理論の場合には、ポジティブ感情、エンゲージメント、意味・意義をめぐる思考や感情についての単なる自己報告ではない。したがって、生活満足という実体ではなく、ウェルビーイングという構成物がポジティブ心理学の主要テーマなのである。

この部分の解釈は難しいのだが、この部分でセリグマンは、風冷指数が凍傷や凍死を避けるという実用的な目的のために構成物として定義されているのと同様に、人々の生活を向上させるという目的をもつポジティブ心理学においてもその便宜的な尺度として「福利」を構成し定義すべきだと述べているように思われる。

セリグマンは、増進的介入の目標物として 2002 年の段階の真正幸福感 authentic happiness を捨て、PERMA と呼ばれる五つの尺度で人々の福利を向上させようと提案している。その内実は、(1) ポジティブ感情 (Positive Emotion、快)、(2) 活動への没入 (Engagement)、(3) 「意味」 (Meaning) に加え、(4) ポジティブな人間関係 (Relationship)、そして (5) 達成 (Achievement) の五つである。

この五つの要素の選択の基準は、「人々がそれ自体のために望む／選択する」ものであることだ。「人々がそれ自体のために望む／選択する」ものはポジティブ感情、エンゲージメント、意味の三つだけではない。少なくとも、良好な人間関係はほぼ普遍的に求められているものであり、上のポジティブ感情や活動、意味とは別にそれ自体独立して考慮されるに値する。さらに、人々のなかには、富のための富、勝利のための勝利、達成のための達成を、それ自体のために求める人々が存在する。セリグマンが観察するところでは、彼の趣味のコントラクトブリッジ競技のトップレベル競技者にはまさにそうした人々がいるという。そうした人々にとっては、ブリッジに勝つことそれ自体が関心事であり、勝利してもさしてポジティブな感情を得ているようには見えず、つぎのゲームに進むだけである。そうした際限なく勝利や成功や富ををもとめ続ける人々は、必ずしもポジティブ感情や熱中や意味、人間関係をもとめているようには見えないことがある。したがってセリグマンはそうした人々の求めるものも我々の福利として数えあげねばならないと考える。



ポジティブ心理学の課題は人々が実際に福利を得るためにおこなっていることを指令 prescribe するのではなく記述 describe することである。達成という要素をリストに追加したのは、達成する人生の価値を裏書するためでもなければ、より頻繁に勝利するために自分自身の福利への道からそれるべきだと言おうとしているためでもない。むしろ、これをリストに含めたのは、人間が、強制が存在しないときに、それ自体のために選択するものを記述するためである。

セリグマンはあくまで心理学という記述的な領域にとどまろうとしているわけである。これは理解できる態度ではあるが、結局のところその議論の構造は、(1) 人々が求めるものを得ることが幸福・福利に貢献する、(2) 人々が求めるものはつめれば PERMA である、ということになるが、PERMA のリストの作成手段は、とても科学的とは言いがたいように見える。しかしながら、結局のところ、福利・幸福とは我々がそれ自体のために求めている多様なものを可能なかぎり手に入れることであるという以上の規定は難しいのかもしれない。そして求めているすべてを手に入れることはできないのだから、自分にあった道 path からそれに辿りつこうとする以外にないが、そうした道はたくさんあるし、科学的な研究と伝統や慣習や教養はその道をわかりやすく、あるいは歩きやすくしてくれるということは言えるだろう。

## 4.2 倫理学者はなにを目的にする？

では、倫理学者が幸福の概念と内容を検討する際には、なにを目的とすべきだろうか？

1. 社会・公共政策
2. 自分の将来の生活・人生の選択
3. 自分の過去の生活・人生評価
4. 自分が現在不幸なのはなにか欠けているからか考えたいとき<sup>\*7</sup>
5. 自分自身や他人の人生の全体としての評価
6. 自分が「ケアしている」人々の将来の選択
7. ……

それぞれについて、もし我々の考えている幸福が計測できる実在物・実体ではなく、それらからの構成物であるならば、別々の「幸福」の概念を用いることが正当化されることは十分にありえる。

## 4.3 幸福概念内容の使いわけ？

【公共政策】公共政策として、人々を幸福にするために、「みんなそれぞれ大切なものが実現するように努力してください、お手伝いします」というアドバイスはほとんど役に立たない。「それぞれ大切なものを答えてください、それを実現するお手伝いをします」の形になればまだましだろう。もっとも、我々人間に共通する本性なるものがあるとすれば、その求めるものにも、(ある程度の抽象をおこなえば) さして多様ではないかもしれない。それはセリグマンの PERMA や、ヌスババウムとセンの潜在能力アプローチでリストアップされるようなことがらかもしれない。そうした客観リストは、公共政策による世界の改善のある程度の目安としては

<sup>\*7</sup> 「涙を流し、ため息をつき、それが何であるかははっきりないが、しかも自分には欠けていると感じている幸福にあこがれた。こんな気持は書きあらわしようがない。」ルソー『告白』第3巻冒頭部分

役に立つはずだ。客観リストは、多くの人々が（おそらく人間の本性から）これまで求めてきたもの、そしてこれからも求め続けるであろうものをリストアップし、それを実現する方策とするところに意味があるのだ。

【将来の選択】一方で、自分の将来の生活の選択にあたっては、幸福についての問いは、まさに自分が本当の意味でもっとも望むものはなんであるのか、という問いが重要になるはずで、これに対して「君が大事に思うことが実現するのが君の利益／幸福だ」とアドバイスするのは実践的な意味がほとんどないように思える。

【回顧】自分の過去を回顧するとき問題になる幸福はどうだろうか。私の直観では、これに答えるのがむずかしい。自分のポジティブ・ネガティブな心的状態はたしかに重要であるように思えるし、また自分がその時々おこなっている活動の達成や、その活動がどれほどの「意味」をもっていたか、またどれくらい没入できるものだったか、も重要であるように思える。見逃せないのが、人間関係で、おそらく私たちが人生を回顧する場合にはどんな人々とどんな関係をもったか、あるいは問いは「もっとも感謝すべきだったのは誰か」のような形をとるのかもしれない。ここでは、「自分が大切に思っていたことがどれくらい実現したかが大事だ」という立場はそれなりに意味がありそうだ\*8。

【他人の生活の比較】他人の生活や人生を評価するということはかなり不遜な響きがある。我々がカントとJ.S. ミル、あるいはウィトゲンシュタインとハイデガーの人生を比較してどちらが幸福だったろうか、と考えるのは奇妙なところがある。こうした比較をおこないたいくなるのは、そうした人々の人生を考えながら自分の人生に応用したいからかもしれないし、また一部は公共政策のために必要だからそうするのだろう。

【自分が大切にしている人々の現在と将来についての選択】一番興味深いのがこの問いだろう。『幸福をめぐる哲学』の冒頭では、著者の御母堂の塩分制限の話が登場する。幸福に関する問いの一番重要なものがこうしたそれぞれの「大切な人々」の幸福に関する判断にかかわる場合だと思う。ヘアは『道徳的に考えること』のなかで、自分の子供にどんな道徳的原則、道徳観をもってほしいかという話をもちだしているのだが、幸福の問いに関しても同様の設問は非常に有効であるように思える。ここでも「その大切な人が大切に思うことが実現するように」という形式を願うことはあまり実践的でない。まさに、その内実が問題なのだ。我々は自分の大切な人々にはどんな生活を送ってほしいだろうか？そうしたときには、セリグマンの PERMA のように、一定のポジティブ感情をもち、一定の没入した活動をおこない、一定の人生・生活の「意味」を感じ、良好な人間関係をもち、（もし当人がそれを求めれば）ある程度の達成を得られるような生活だろう。

## 5 結論

- 個人的には、私（江口）自身にとって、哲学や倫理学は、肯定的な形で、幸福になる方法や人生の意味を教えてくれる学問ではない。むしろ、幸福や人生の意味についての誤った考え方を排除してくれるネガティブな訓練だ。哲学はなにか不要なものを排除する必要がある。
- ソクラテスの昔から、哲学は、我々の思い込みを正し、まちがった考え方を排除するものだ。『幸福をめぐる哲学』はそのていねいな論証にはすばらしい価値があるが、最終的な立場は排除すべきものを十分排除しきれていないし、また我々の行動指針としても、社会政策にかかわる方針としてもあまり有効でない。
- 幸福が究極的には我々の態度や欲求に依存するという成田の立場には強く賛成するが、常識的や我々の

\*8 ただし、「記憶」は非常に問題が多い。カーネマンの「デュレーション・ネグレクト」効果などに注意。活動のピークの快・不快と、その経験の終了時の快・不快のみが記憶され、その時間的持続はほとんど記憶から失なわれる。我々は過去の経験を一塊のものとしてしか記憶できず、積算された全体の快・不快の「量」を回顧することはむずかしいのである。

日常的な直観を擁護しようとするあまり排除すべきものを排除しきれていないのではないかと思う。

- たとえば「価値のない快樂はない」あるいは「快樂はそれを大切だと思わない人にはまったく価値がない」、「妻の浮気などそれを知らなければ問題がない」あるいは「知ると知らないとにかかわらず妻に浮気されていたらものすごく不幸になっている」「態度が変更されることはよくあるのであんまり将来のことを心配しても無駄」ぐらいのちょっと（直感的に）意外な排除はどこかでおこなってほしかった。

## 参考文献

Seligman, Martin E. P. (2002) *Authentic Happiness: Using the New Positive Psychology to Realize Your Potential for Lasting Fulfillment*, Free Press, (マーティン・セリグマン, 『世界でひとつだけの幸せ：ポジティブ心理学が教えてくれる満ち足りた人生』, 小林裕子, アスペクト, 2004, ただし邦訳は誤訳が多くアカデミックな用途には使えない) .

—— (2011) *Flourish: A New Understanding of Happiness, Well-being - And How to Achieve Them*, Nicholas Brealey, (マーティン・セリグマン, 『ポジティブ心理学の挑戦：幸福から持続的的幸福へ』, 宇野カオリ監訳, ディスカバートウェンティワン, 2014) .

成田和信 (2021) 『幸福をめぐる哲学：「大切に思う」ことへと向かって』, 勁草書房.